

《指導助言》

◎真相 秀也（徳島市立高校 教頭）

作品評

脇町高校の茅野先生には、「読みの枠組みを問い直す小説の学習 — 『走れメロス』の再読を通して」と題した研究大会の発表をまとめていただき、大変お世話になりました。まさに統一研大会の発表にふさわしい、興味深い内容のものでした。今回、茅野先生は、既習教材の小説を「読むこと」を通して、生徒たちが「読みの枠組み」を問い直し、生き生きと思考し表現できる授業の構築にチャレンジしています。私はその取り組みは、現代文の授業の可能性を更に広げてくれるものであると感じました。同時に自らのこれまでの現代文の授業実践を振り返り、果たしてどれだけのことができたのだろうかと考えさせられました。

さて、現代文の指導は古典の指導に比べ、より教員の力量の差が出やすいと言われます。そのためか、現代文の指導に意欲的に取り組む先生がおられる一方で、どう取り組めば良いのか、あるいは自分の今の取り組みは果たしてこれで良いのかと悩み、試行錯誤を繰り返す先生もおられます。今回の発表はそのような方に大きな示唆を与える、大変貴重なものでありました。

それでは、私からは今後ぜひとも参考にさせていただきたいと思う点やこの取り組みの優れた点等について述べたいと思います。

まず一点目は、生徒たちの読みの変容を図るため、作品を「批判的」に読むというアプローチをした点です。ここでいう「批判的」とは、文章の欠点をあげつらうことではなく、書かれている内容や表現について、

なぜそのように書かれているのか、検討しながら読むということです。

しかし、教える側の教員ですら、扱う作品を「批判的」に読むことはなかなか難しいところがあります。更に言えば、国語の教師として経験を積みば積むほど、その作品を固定的に扱ってしまう恐れもあります。さて、これは茅野先生の授業に対する私の正直な感想ですが、茅野先生の授業は「思考」がアクティブになるそんな授業であるをつくづく感心させられました。

今回の学習指導要領の改訂の背景に、「高校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向がある」ことや、「高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視され得た授業が十分行われていないこと、話し合いや論述などの『話すこと・聞くこと』、『書くこと』の領域の学習が十分に行われていない」ことなどが挙げられます。

茅野先生が実践した授業は、決して講義調のものではなく、生徒たちは教材を通して読み取ったことを踏まえ、思考をアクティブにし、主体的な言語活動を通じ、自分の考えを的確に表現しようとしています。これはまさに学習指導要領の改訂の趣旨に添ったものと言えるでしょう。次に二点目として、既習教材である「走れメロス」を、教材として取り上げた点です。今回授業を受けたのは高校二年生です。おそらく生徒たちの中には、「走れメロス」という中学校で学んだ教材を「どうして今さら」と思った人も少なくなかったのではないでしょうか。

そこには、多くの生徒が「走れメロス」を「人を信じることについての物語」「メロス中心の物語」と捉えていることを上手く利用し、思考

の変容を生みややすくするという狙いがあつたと言えます。

茅野先生は巧みにそのことを利用しながら、刑場に集まった「群衆」という「テクストの（細部）」に着目させることで、生徒たちの読みの刷新を図ろうとしています。

・「群衆」はなぜ刑場に集まっていたのか。

・「群衆」が何を期待して集まっていたのか。

・「群衆」はなぜ「メロス万歳」と言わずに、「王様万歳」と叫んだのか、等々。

そうした点に着目させながら、生徒たちに「走れメロス」の「別の読みの枠組み」を獲得させていつているのです。つまり、そのことを、より短期間で、より効果的にできるのが既習教材である「走れメロス」であつたと言えます。

三点目が、今回の一連の学習活動は、新たな読みの枠組みの獲得に止まらず、さらにもう一歩踏み込み、生徒たちが自らのこととして捉え直す、つまり思考を深めるところまで目的として行われているという点です。そのために、茅野先生は生徒たちに「流されないでいることはできる？」という作文課題も提示しています。そこには、生徒たちの日常に「走れメロス」の文中に見られる「流される『群衆』や『メロス』」が、実はあり得ることを実感させ、意思決定や自己表現の際、果たして自分たちは「流されないでいられるのか」を、考えさせ、表現させようとしています。

そして、生徒たちが課題について考えやすく、より書きやすいように選択肢や書き出し例を示すなど、学習者へのヒントとなるような工夫がなされていることも、生徒にとっては取り組みやすかったのではないで

でしょうか。更に、作文を書く際に全体交流として、生徒たちは教室を立ち歩いて相談したい人に相談できるようにしている点も私にはとても新鮮に映りました。また、書き上がった作文をクラス全体で共有していることも重要な点です。そうすることで、自己が変容したことへの気づきに加え、新たな発見や内省が生まれ、思考を一層深めることができます。

ただ、残念なことは、この実践研究が短期間のものであったところです。今回の授業実践は、茅野先生が鳴門教育大学大学院へ派遣されていた令和2年度に、地籍校実習の一環として、4時間の飛び込み授業として行われたものです。通常の授業であれば、茅野先生がおっしゃるように、ここから更に学習者の思考を深めることも可能だったのではないのでしょうか。茅野先生自身、「生徒が書いた作文の中には『状況によって、よく考えて判断したい』とする感想のように、判断する主体を疑わない立場の者も多く、通常の授業であれば、『主体の虚構性』を指摘する文章を読んで議論することで思考を深めることが可能であったらう」と振り返っています。

四点目は、評価についてしっかり考えている点です。今回の授業は投げ込みで実施されたため評価については対象外となりました。茅野先生はこのような授業実践には、ルーブリックなどの試案を作成する必要性があることも述べています。個人的には茅野先生が、どのようなルーブリックを作るのか非常に楽しみなところもあります。

ただ、課題もあります。それはこのような取り組みを、いくつかのクラスで並行して実施した場合、評価の負担が大きい点です。良い取り組みであるゆえに、いくつかのクラスで実施する場合の評価の負担は乗り越えたい課題でもあります。

新学習指導要領では「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を生徒が学校教育の中で身につけるべき3つの観点とし、それに対応した形で評価することとなっています。また、ペーパーテストだけに偏らない多様な試験方法を用いることも可能であり、その一つが茅野先生がおっしゃるとおり「ルーズブリック」ということになるでしょう。

さて、紙面の都合上終わりにしますが、次年度から新学習指導要領の施行にともない、一年生では新しい科目である「現代の国語」と「言語文化」を履修することになります。その中で「小説」が、「現代の国語」ではなく、「言語文化」に、「古文」や「漢文」と一緒に収められています。学校によっては単位数の関係から古典の学習が中心になり、なかなか「小説」まで扱えないのではないかと危惧するところもあると聞きます。今回の茅野先生の発表を読むにつけ、何とか各学校で工夫を凝らし、こうした「小説」での取り組みを活用していただきたいと願うばかりです。

最後になりますが、茅野先生にはお忙しい中、貴重な発表をさせていただき心からお礼を申し上げますとともに、これからも本県の高校における国語教育を牽引するような研究や取り組みを引き続きお願いし、私からの講評とさせていただきます。